

聖書：マタイ 28：16～20

説教題：復活の主の命令

日時：2020年10月18日（朝拝）

マタイの福音書の最終回はガリラヤにおけるイエス様の言葉をもって結ばれます。なぜガリラヤでしょうか。前回も見ましたように、ガリラヤはイエス様が宣教を開始されたところでした。この福音書の4章12～17節に記されていましたが、それは次のイザヤの預言を成就するものでした。「ゼブルンの地とナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦人のガリラヤ。闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。」イエス様はそのようにガリラヤで宣教を開始され、天の御国の福音を宣べ伝えて歩き、私たちの救いのための十字架と復活を成し遂げられました。そしてついに勝ち取られたこの福音を、これから弟子たちを通して新しく宣べ伝えて行こうとされます。その御心を示すにあたってふさわしい場所はどこでしょうか。それはこのマタイの福音書によればガリラヤです。イエス様が始められた宣教の働きは再びここから継続されます。そしてここには特別のメッセージもあることを前回見ました。それはこの福音はどんな暗闇の中に座している人にも差し向けられているということです。かつて自分たちの罪のゆえにアッシリヤに捕囚され、その結果、異邦人の血が混じり、中央のエルサレムからは「異邦人のガリラヤ」と軽蔑され、何の良いものもあそこからは出ないと見下されていた暗黒の地にも福音の光は注がれる。失意と落胆の中にある人々、希望を持たず、死の陰に座しているような人々に福音は差し出されるということです。まさに全世界への福音宣教について命じられるにふさわしい地であったと言うべきでしょう。

さてそのイエス様の御心を受け継いで宣教の働きを継続するために集められた人々はどんな人たちだったのでしょうか。16節に「11人の弟子たちは」と出て来ます。なぜ11人でしょう。12人いたはずではないでしょうか。ご存じの通り、一人欠けたのはユダがイエス様を裏切ったから、そして自ら命を絶ったからでした。主の前に立つ彼らの組織はボロボロでした。また問題はユダだけではありませんでした。彼らがこの福音書で最後に出て来たのは、イエス様が逮捕される時にイエス様を見捨てて散り散りバラバラに逃げ去った箇所です。その彼らも本来、到底イエス様に顔向けできないような者たちです。彼らはただあわれみによってイエス様の前に再び立たせていただいていたいました。

しかも 17 節に、ある者たちはイエス様に会って礼拝したものの、そこには「疑う者たちもいた」と記されています。果たしてこれは 11 人の中のある者たちだったのか、それとも 11 人以外にそこにいた者たちのことなのか、議論があり、定かではありません。I コリント 15 章 6 節には、復活したキリストは 500 人以上の兄弟たちに同時に現れたと記されていて、それがこの時だったのではないかと言う学者たちもいます。しかしいずれであれ、ここにあるメッセージははっきりしています。それはこの時、主の前に立っていた人たちは完全な人たちではなかったということです。12 弟子のトマスでさえ、ヨハネの福音書 20 章に記されているように、イエス様の復活をなかなか信じられませんでした。ある意味で復活はそのような出来事と言えます。どう受け止めたら良いのか混乱してしまい、ある人たちは容易に信じるができなかった。しかしそのような人々にマタイの福音書最後の主の大命令は与えられるのです。

さてそのイエス様が語られた言葉は大きく三つの部分に分けることができます。まず命令に先立って語られたのは主の偉大な主張です。18 節：「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。』」 イエス様はもともと神としてすべてのものの上に主権を持っておられますが、ここに言われているのは、十字架と復活を通して得た救い主としての権威です。これまでは人間の罪の結果として、この世界の上にはサタンが支配権を持っていました。サタンは「この世の君」と聖書で呼ばれています。また死が支配していました。死はすべての者の上に圧倒的な支配権を持ち、有無を言わずにその力の下に従えていました。聖書で死は「最後の敵」とも表現されています。しかしイエス様は私たちの罪を背負って十字架上で死に、復活されました。これによって死の力を打ち破り、またサタンの支配をも壊されました。そして父なる神によってすべての上に高く上げられる方となりました。エペソ人への手紙 1 章 20～21 節：「この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

これは私たちに大きな慰めを与える真理です。私たちはこの言葉に聞く時、改めてこのことを知ります。この世界はサタンや罪や死が支配しているところではない。あるいは偶然とか運命とか得体の知れない何かの力が支配するところでもない。天地にわたる一切の事柄の上に真の主権を持っているのはイエス様です。私たちのために死んでよみ

がえられた方、より頼むどんな罪人をも最後の救いまで導いてくださる方が全権を持っておられます。そういう意味でこの世界はイエス様の復活によって大きく変わったというのが聖書の主張です。今やこの世界と宇宙はキリストが治めるところとなった。キリストこそすべてのものを御手の下に収め、父なる神の計画が最終的に実現するまで導かれるまことの王であられる。これこそ続く命令の基礎となることです。

第2に見るのはその主の偉大な命令です。19～20節前半：「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」このイエス様の言葉は一般に「大宣教命令」と呼ばれますが、ここの主動詞は一つで、それは「弟子としなさい」という言葉です。ですからこれは「宣教命令」ではなく、「弟子化命令」とすべきだと言う人もいます。弟子としなさいとは、あなたの弟子にしなさいという意味ではなく、もちろん主の弟子にしなさいという意味です。弟子とは学ぶ者、生徒を意味します。つまりイエス様に学ぶ人、イエス様の生徒になることです。イエス様を先生として持つことほど幸いなことはありません。11章29～30節でイエス様は「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」と言われました。その方の御言葉に聞き続け、理解し続け、従い続ける者となることです。

このメインとなる命令を支える3つの言葉が、分詞の形で述べられています。一つ目は「行って」。これはイエス様のこれまでの働きがイスラエルに限定されていたのに対して、今や全世界の上に主権を持ちたもう方として、全世界の人々に福音を伝えるべき時が来たことと関係します。ですから「行きなさい」と言われています。あらゆる国の人々を弟子とするために出て「行かなければ」ならない。これはもちろんすべての人々が海外宣教師にならなければならないということではありません。私たちの周りにも宣べ伝えるべき方々は沢山います。心に留めるべきは私たちの方から「行きなさい」と言われていること。誰かが求めるようになることをただ待っているのではなく、あなたの方から「行って」、この働きに当たれ！と言われています。

2つ目の分詞は「バプテスマを授けなさい」。すなわち洗礼を授けなさいということです。「父、子、聖霊の名において」とある部分は、原文では「父、子、聖霊の名の中へ」

という表現になっています。そして「名」という言葉は単数形で書かれています。つまりこの洗礼は三位一体の神との生ける結合を表すしるしであるということです。イエス様はここで洗礼をこの世が続く限り行うべきものであるとされています。心で信じれば、形としての洗礼は受ける必要がないとは仰っていません。恵み深い主権を持つ救い主イエス様により頼んで生きることを洗礼を受けることによってスタートし、キリストに連なる者、そのからだである教会の一員となること、そして三位一体の神との豊かな生ける交わりに歩む者となるように招いておられます。

そして3つ目の分詞は「教えなさい」。洗礼はゴールではなく、むしろスタートです。その後に主の言葉を学び、それを守る生活が続く必要があります。注目すべきは「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように」と言われていることです。自分の好きな御言葉だけえり好みするのではなく、イエス様が命じた言葉全部、言い換えれば聖書全体に関心を払い、それらを学び、守り行うように教えなさいと言われていています。この福音書で見て来たパリサイ人たちのような律法主義ではなく、イエス様が説き明かされた律法の真意に沿って具体的に生活するところに、本来の人間性を回復する道があり、またいのちがあるのです。

最後3つ目に見るのは主の偉大な約束についてです。20節後半：「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」 マタイの福音書最後の言葉は弟子たちへの命令で終わっていません。もし私たちへの命令で終わっていたら、それは時に私たちに重過ぎると感じられるかもしれません。しかし最後は約束で締めくくられています。特にキリストはどんな方かに焦点が当てられた言葉です。こうしてこの福音書は私たちがすべきことで終わっているのではなく、キリストはどんな方かというメッセージで結ばれています。そのメッセージをいつも私たちの心に響かせているように、ということでしょう。

この言葉を読む際、私たちがセットで頭に入れるべき御言葉は何でしょうか。それはこの福音書の1章23節の御言葉です。そこにイエス様のこの世への誕生は「神が私たちとともにおられる」というイザヤ書のインマヌエルの預言が成就したものだと言われました。その部分とこの28章20節の最後の言葉は呼応しています。どういうことでしょうか。私たちは罪のために神との交わりを失い、神から遠く離れていた者たちでした。しかしそんな私たちのところにイエス様は人として誕生してくださり、インマヌエル、

すなわち神は私たちとともにおられるという方になってくださいました。そしてその方は十字架と復活を経て、神の祝福を私たち罪人に豊かにもたらず方となってくださいました。その方がこの福音書の最後で「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言ってくださいています。このメッセージを十分に味わうべきではないかと思えます。

「いつも」という言葉は、原文を直訳すれば「すべての日々に」となります。「一つ一つの日すべてに」です。つまりイエス様がともにいない日は一日としてないのです。私たちはそのように思っているのでしょうか。もしかすると私たちは調子が良い日にはイエス様がともにいるような気がして、そうでない日にはともにいないかのように思っているかもしれません。イエス様は私とともにいてくださる日と、そうでない日とがあるかのように。しかしそうではないのです！すべての日々にともにいてくださるのです。悲しみで一杯の日にも、喜びに溢れた日にも。また病気の日にも、健康な日にも。また生きている生の日にも、あるいは死を迎えるその日にも。しかもともにおられる方は、私たちのために十字架にかかり、その負債をすべて支払って復活された方です。私のどんな罪も赦し、また私をあわれみ、きよめ、日々造り変え、天の御国に至るまで導いてくださるお方です。その方がいつかともにいてくださるようになるのではなく、現在形で「ともにいます」と言ってくださいています。今、この時も、今日も！です。これは何という幸いでしょうか！これを知っていれば、私の人生にどんなことがあろうと、私は一人ではないということが分かります。私には友が一人もいないということはクリスチャンにはないのです。イエス様がいつも私と一緒にです。そしてとてつもない十字架と復活による力をもって私を支え、救いの祝福に生かしてくださいています。世の終わりまで、すなわち救いの完成の日まで、そして永遠にです。これこそクリスチャンに与えられている特別な幸い、また喜びでしょう。

この祝福を心から味わいながら、私たちはこの主の大宣教命令に従うのです。決して無に等しい人間の力でするものではありません。ともにいてくださる主に励まされ、強められながら、主ご自身が始め、これからも継続する働きに加えさせていただくのです。困難な時、そしてうまく行かない時もあるでしょう。しかし主がともにいてくださる事実は、それによって変わりません。イエス様は世の終わりまで、毎日毎日すべての日々にともにおられます。その事実を感謝し、力づけられて、宣教の働きに身を献げるようにと導かれているのです。

この時、イエス様の前にいたのはほんの一握りの人たちでした。田舎の出身の者たちで、イエス様を一度は見捨ててしまった人々、組織も欠けてボロボロで、こんな彼らに何ができるだろうかと思われるような人たちでした。しかしこの後、福音は実際に全世界に伝えられて行き、世界全体を覆うほどまでになりました。これはここで語られた主の言葉の真実さを物語っています。主がいつもともにおられたからこそ、ここまでの歩みが導かれました。そしてこれからも世の終わりまで、この働きは続けられて行きます。そういう意味で今日の箇所はマタイの福音書の終わりの箇所ですが、ここは「終わり」と言うより「始まり」の箇所と言えます。ここで何かが閉じていると言うよりも、新しいことがここから始まっているという箇所です。その続きの章はこれまでの歴史が書いて来ましたし、さらにその続きの章をイエス様とともに書いていくのは私たちです。主イエス様は十字架と復活の生涯を通して、天と地にわたるすべての権威を勝ち取られました。そしてその権威に基づく救いの恵みに生きるようにとすべての人を招いておられます。そのために愚かで欠けだらけの私たちを用いて、その働きを継続しておられます。この主の大命令に心して聞き、喜びを持って従う主の教会であり続けたいと思います。主が私たちにこのように約束してくださっていることを心に響かせながら。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」